バドゥ歌謡に関する覚え書き

大西正幸
総合地球環境学研究所
ドゥルガ・ドット
Bidhannagar Government High School

序

インダスプロジェクトの 4 年あまりの間に、インドの基層文化研究の一環として、ベンガル地方に口承で伝わるさまざまなジャンルの儀礼・宗教歌・歌謡・民話等の音声・映像データを集めてきた。それらはまだ整理されておらず、プロジェクト期間中にその成果を十分あげることができなかったが、これらのデータをもとに、今後息長く研究を継続していきたいと考えている。このような地道な研究を続ける機会を与えてくれたリーダーの長田さん、および各研究班のコアメンバーのみなさんの寛大さに心から感謝するとともに、今後の研究の方向性だけでも示せればと思い、この覚え書きを最後の成果報告書に掲載させていただく次第である。

なお、本論考に用いたバドゥ祭祀の社会文化的背景、バドゥ神像の製作、歌謡およびその歌い手についてのデータは、研究協力者であるドゥルガ・ドットの 1980 年代に行ったフィールド調査と、私とドゥルガ・ドットが 2010 年 9 月にバンクラ県で行った調査に基づいている。それらのデータはまだ分析の途中である。

ドゥルガにとって、2010 年 9 月の調査は、1980 年代に行った調査の追跡調査の意味合いを持っていた。この 30 年近い歳月の間に、ベンガルの他の多くの口承伝統と同じく、バドゥ祭祀は衰退の途にあり、その細部は徐々に変容を遂げつつある。しかし、この祭祀は、低カーストの女性たちの専権的な祭祀であるため、変容の度合いは他の口承伝統に比べると少ないと言えるかもしれない。

なお、本論考は、私と彼の共同調査によって得られたデータと、その過程での二人の議論から生まれたものなので、彼の名前を共著者としてあげることにした。

1　バドゥ歌謡の背景

バドゥ歌謡（Bhādu gān）は、インド西ベンガル州の西部からジャールカンド州の東部にかけて広がる、バドゥ祭祀の際に歌われる歌謡である。バドゥ祭祀（Bhādu pūjā）とは、農閑期のバドロ月（bhādra mās 西暦の 8 月半ばから 9 月半ば）、特にこの月の後半に、おもにヒンドゥー下層の女性たちの間で行われる祭祀である。祭祀の中心となるのは未婚の女性たちだが、年老いた女性たちや寡婦たちも加わる。この祭祀はしかし、バラモンが祭司を務めるヒンドゥー教

の正規の祭祀とは違った、きわめて素朴な儀礼である。神像を家の一角（決まった場所はない）に飾り、その前に女性たちが集まって供え物をし、夜遅くまで（時には一晩中）歌を歌って過ごすのである。

ベンガル地方西部で行われるこれとよく似た祭祀に、トゥシュ祭祀（Ṭusu pūjā）がある。こちらは、収穫が終わったポウシュ月（西暦の 12 月半ばから 1 月半ば）に行われる儀礼で、これもやはり女性たちが中心となり、家々で歌を歌って祝う。（なおトゥシュ祭祀については、2012 年の 1 月に集中調査を行ったばかりであり、このデータもまだ整理されていない。）

このような女性たちの土俗的な儀礼は、ベンガルでは一般に「ブロト」（brata）と呼ばれるが、バドゥとトゥシュはどちらもブトロとは呼ばれず、「祭祀（プジャ）」（pūjā）と呼ばれる。ヒンドゥー化以前の農耕儀礼の痕跡を深く刻んでいながら、「覚醒」（jāgaraṇ）、「川流し」（bhāsān）といった、ヒンドゥー教の女神の祭祀の要素も取り入れており、一定程度のヒンドゥー化が進んでいることを示している。だが、ヒンドゥー教に正式に受容された他の土俗的な神々、たとえば蛇の女神であるモノシャ（Manasā）女神には、それにまつわる物語（霊験記）があり、その女神としての性格がはっきりしているのに対し、バドゥやトゥシュにはそれがなく、その実態はきわめて曖昧である。（バドゥに関しては、4 で述べる、領主家の娘としての伝説があるが、女神としての物語ではない。）

2　バドゥ祭祀

上に述べたように、バドゥ祭祀は、バドロ月（西暦の 8 月から 9 月半ば）に、ヒンドゥーの女性たちの間で行われる儀礼である。過去には、下層だけでなく教育を受けた中・上層の女性の間でもこの儀礼は広く行われていたが、近年になって後者の間での伝承は衰退してきており、次第に、日雇い労働を主な生業とする識字率の低い下層の女性たちの間に限られてきている。

バドロ月の後半に、女性たちは、製作者のもとにバドゥ神像を買いに行く。そしてその像を一人（多くの場合、その家の男性）の頭に載せ、女性たちが歌いながら随伴し、歩いて家まで運ぶ。これに男性たちが大太鼓などを叩いて随伴することもある。（製作者が減っていることも一因で、最近は遠くの村まで買いに出かけ、そこから人力車や自転車、バイクに乗せて家に持ち帰るケースが増えている。）

図 1　バイクに乗ってバドゥを運ぶ。運んでいるのは、後背を持った、クリシュノを膝に抱くバドゥ

家の一角に神像を安置し、花で飾り、シ

図 2　川流しに向かう

図 3　川流しの前のシトル

トル（śītal）と呼ばれる供物を供え、夜にはその周りに女性たちが集まって歌を歌う。シトルに欠かせないのは、きゅうりと、何種類かの甘菓子である。また、飾る花も、蓮の花（śāluk/śāplā）、マリーゴールド（gẽda）の二つは欠かすことができない。月末が近づくにつれ、歌の集まりが賑やかになる。

バドロ月の晦日（bhādra-saṅkrānti）が、バドゥ神の「覚醒」（jāgaraṇ）の日で、この日の夜は、女性たちは家々に集まって、夜通し歌を歌う。

翌日、アッシン月（āśvin mās）の初日が「川流し」（bhāsān）の日で、この日の朝から夕方にかけて、近くの川ないし池に神像を流しに行く。このときは女性が神像を頭に載せ、他の女性たちは歌いながら随伴し、目的地の川か池まで歩いて行くのである。目的地に着くと、そこにいったん神像を下ろし、その周りでひとしきり歌を歌ったあと、神像に最後のシトルを供する。そして、ホラ貝の響きとともに、像を水の中に流す。そこで儀礼は終わり、女性たちはそのあと沐浴をすませて村に帰る。

3　バドゥ神像

3.1 バドゥ神像の種類

バドゥ神像にはさまざまな種類がある。きわめて素朴な、未婚の女性を象った小さな土偶のようなものから、ドゥルガ（ドゥルガー Durgā）やショロッショティ（サラスヴァティー Sarasvatī）のようなヒンドゥーの正規の女神像に見まがう、後ろに後背を持った大型のもの、またクリシュノ（クリシュナ Kṛṣṇa）、カルティク（カールティカ Kārtika）のような男性神を象ったものまである。

2011 年にバンクラ県ビボルダ村周辺での調査で観察した、神像の主な種類には、次のようなものがある。

(1) 指無しバドゥ（ragā/ṭũṭā Bhādu）
(2) 嫁バドゥ（bau Bhādu）
(3) キシュト（クリシュノ）バドゥ（Kiṣṭa/Kṛṣṇa Bhādu）

(4) カルティクバドゥ（Kārtika Bhādu）
(5) クリシュノを膝に抱くバドゥ（Kṛṣṇa kole Bhādu）
(6) 椅子にすわったバドゥ（ceare capa Bhādu）
(7) 後背を持ったバドゥ（meṛ Bhādu）

このうち、(1) は主に子供たちが遊ぶための土偶のような小型のものであり、(2) - (4) は小型から中型のものが多く、(5) - (6) は中型から大型のもの、(7) は (5) - (6) に飾り付けをした、大型のものである。

図 4　嫁バドゥ（左）とキシュトバドゥ（右）

3.2 バドゥ神像の製作

バドゥ神像の製作は、おもに土器製造を生業とするクモル（kumor）カーストの人びとによって担われる。（場所によって、木を扱う職人のチュトル（chutor）カーストや、金属を扱う職人のカマル（kāmār）カーストの人びとが、兼業で作る場合もある。）

神像はふつう、頭部だけは土製の型にはめて作り、身体部分は手で作り、それら二つの部分をあとで接合する。こうしてできた像を陽に当てて乾かし、全体を白く塗って、その下地の上に絵付けを行う。

絵付けに使う色は、明るい黄色、群青色、ピンク、そして赤が主である。顔料は、もともとは野生のベール（bel）の実から作った糊を混ぜた自然のものを使っていたが、今日では市場で売られている化学顔料を用いる場合がほとんどである。

図 5　絵付け

製作者は、先に述べたように、クモル・カーストの人びとが主である。1980 年代の初頭には、毎年バドゥ像を作ることで知られる村が、バンクラ県を中心に、約 40 あった。現在その数は半分以下に減っているものと思われる。特に有名な村々の製作者の場合、その製作手法を親子で継承する例がよく見られたが、そのような継承も次第に廃れつつある。また、神像の種類や、その配色、装飾にも、1980 年代の調査時と今日とではかなりの違いが見られる。

4　バドゥをめぐる民間伝承

バドゥをめぐっては、バンクラ県カシプルの領主の娘、ボッドレッショリ（Bhadresvarī）であったとする伝承が、民間に広く伝わっている。この伝承にはいくつかのヴァージョンがある。代表的なものをあげる。

(1) バドゥはカシプルの領主の娘で、非常に可愛がられて育った。適齢期になったので、別の領主の美しく才能ある息子を婿として迎えることになった。ところが、婚礼の夜、式に向かう途中、その婿は、盗賊の一団にあって殺されてしまう。それを悲しんで、バドゥはその後死ぬまで未婚のままだったと言う。
(2) 未来の花婿が死んだ悲しみのあまり、バドゥは食を断ち、死んでしまったという言い伝えもある。
(3) バドゥはカシプルの領主の娘で、非常に可愛がられて育ったが、適齢期になった頃、不治の病にかかり、死んでしまう。それを悲しんで、領主は、バドゥを記念する祭祀を始めたのだと言う。

これらの伝承すべてに共通しているのは、バドゥがカシプルの領主の娘であったという点と、未婚であったという点である。だがこの伝承は、バドゥ像の実態とは一致しない。先に述べたように、バドゥ像には、クリシュノ、カルティクなどの男性の像である場合があり、また女性像の場合でも、額の髪の分け目が既婚のシンボルである赤いシンドゥル（sīdur）で彩られていたり、幼児のクリシュナを抱えていたりする。さらに、伝承されているバドゥ歌謡の中にも、バドゥが既婚でないと理解できないものが多く見られる。

この点からも、バドゥ祭祀は、特定の女神を対象とした祭祀というよりは、むしろ、農閑期に束の間の自由な時間を持ったヒンドゥー低カーストの女性たちが、自分たちの想像力を自在に発散させる場であることがうかがえる。バドゥとは言わばその想像力の導火線のようなもので、そこに想像力が収斂するわけではない。だから、カシプルの領主の娘であった、あるいは未婚であったという伝承が、他のバドゥのイメージと矛盾なく同居しうるのである。

5　バドゥ歌謡の形式と内容

バドゥ祭祀は、ヒンドゥー下層の女性たちの想像力発散の場であると述べた。その想像力の内実が最も明確に現れるのは、さまざまな内容を持ったバドゥ歌謡のテキストである。

バドゥ歌謡はどれも、ほぼ同じ旋律形で歌われる。各行 7-8 音節の、4 行からなる歌詞を基本とし、長い歌の場合はこの 4 行を何連か続ける形態をとる場合が多い。（ただし、中には例 10 のように、この形態を逸脱して展開される歌謡もある。）旋律は、すぐにバドゥ歌謡だとわかる、ほぼ一定したものである。

以下、バドゥ歌謡のテキストを 10 篇あげ（6 を参照）、それらを主題の上からおおまかに 3 つにわけて簡単に解説することにする。（なお、この小論では、バドゥ歌謡の多様な内容のほ

んの一部しか取り上げることができなかったことを、あらかじめ断っておきたい。）

5.1 バドゥに直接呼びかける歌

(1) は、バドゥを川流しする時の歌。(2) は、バドゥ儀礼ときゅうりの関連を示す歌。いずれも儀礼に密接に関連している。それに対し、(3) は、若い娘としてのバドゥのイメージに託して、女性の心情を歌ったもので、内容的には 5.3 に近い。

5.2 神話との関連

(4) はラマヨン（ラーマーヤナ Rāmāyaṇa）のラーム（ラーマ Rāma）に対する弟ロッコン（ラクシュマナ Lakṣmaṇa）の愛情を歌ったもの。(5) はクリシュノ神の神話に基づくもの。(6) は、4 で述べたカシプルとの関連で、この地名が出て来る。これらのいずれも、もとの神話や伝説の内容とはあまり関係なく、ベンガル農村の日常生活での体験をもとにした女性たちの感情が表現されているのがわかる。

5.3 女性たちの日常生活から生まれた直接的な感情表現

バドゥも神話も関係なく、直接的な感情を表現したもの。

(7) は、義兄にからかわれて死ぬ程恥ずかしい思いをする嫁の心情。(8) は、兄弟とその嫁たちとの間の女性の葛藤。(9) と (10) は社会的に禁じられた愛情を歌ったもの。

6　バドゥ歌謡テキスト

ここであげる歌の実例は、ドゥルガ・ドットが 1980 年代のフィールド調査で集めたものを書き起こしたものである（歌い手については 6.2 を参照）。それぞれ、元のテキストをおおまかな音声標記で示し、その下に和訳を付した（[j] は y、[tʃ] は c、[dʒ] は j で示した）。なお、歌の言語はベンガル語の西部方言（ジャルコンディ方言）で、西ベンガル州の標準ベンガル語方言と比べて、次の 4 つの大きな（形態）音韻上の特徴がある。

(a) 標準方言 [o] が語末で多くの場合西部方言 [ɔ] に対応。
(b) 標準方言 [o] が語中でしばしば西部方言 [u] に対応。
(c) 標準方言の動詞語形、特に語末の [e] の前に、西部方言形では渡り音 [j]（y で標記）が頻出する。この [je] は、さらに [æ] となる傾向がある。
(d) 標準方言 [ʃ] には、西部方言の [s] がほぼ対応する。

6.1 テキスト

(1)
bhadu bhadu kɔri ma
bhadu nai ma ghɔre go
ke bhaduke lie gæchæ
phuler mala die go

バドゥちゃん、バドゥちゃんと呼ぶのだけれど、
バドゥちゃんは家にいないの。
誰がバドゥちゃんを連れてったの、
花環を捧げて。

(2)
sɔsatɔler bhadu tumi
sɔsa kine khabe na
sisirete ubucubu
kænæ ghɔrke ele na

きゅうり棚の下のバドゥちゃん、
きゅうりは買って食べないの。
露に濡れてびちゃびちゃ、
どうして家に来なかったの？

(3)
bhadu tumi　dɔkkhin jabe go
khida laglye khabe ki
anɔ bhadu ga'er gamcha
rɔser miṭhai bẽdhe dii
rɔser miṭhai khe'e bhadu gɔ
gɔrɔm jɔl ar khe'ɔ na
sɔja rastaĕ cɔlye jabe
karu pane cayɔ na
jaker jama pɔrye
cirɔkal ki thakbi go baper ghɔre

バドゥちゃん、南（プーリー）へ行くんでしょ。
おなかが減ったら、何食べる？
あんたの手ぬぐい、もってらっしゃい、
甘いお菓子を包んであげる。
甘いお菓子を食べたら、バドゥちゃん、
お湯を飲んではだめよ。
まっすぐ道を歩いて行くのよ、
誰の顔を見てもだめよ。
きれいなおべべを着たままで、
いつまでも嫁がずに、いられるものかしら？

(4)
ɔ ramer ma ɔ ramer ma
ram kæne dhulaĕ paṛye
chɔṭɔ bhai'er bɔṛɔ maĕ'a
dhula jhaṛye lei kole

ああ、ラーマのお母さん、
ラーマはどうして塵にまみれているの？
弟はラーマが好きでたまらなくって、
塵を払って抱いてあげたいって。

(5)
dɔkkhineri pɔthe jete
sudu tamaleri bɔn
kiṣṭɔ ṭhakur khæla kɔre
dhare dhare gɔpigɔn

南（プーリー）へ行く途中に、
タマルの木ばかりの森があって、
キシュト（クリシュナ）神が遊んでいるの、
牛飼いの女たちに囲まれて。

(6)
kasipurer basi kapɔṛ
rakhbi ma peṛai kɔrye
amra du bun mɔrye gælæ
kãdbi ma binɔĕ kɔrye

昨日着たカシプルのサリー、
アイロンかけてしまっておいてね、母さん。
私たち二人姉妹が死んだら、母さん、
悲しんで、咽び泣いてちょうだいね。

(7)
mac bɔnalyɔm caka caka
macer kaṭa sijlyɔ na
bhasur hɔe jigir kɔre
i jibɔn ar rakhbyɔ na

魚の切り身をいっぱい作ったの、

魚の骨が生焼けだったの。
義兄（にい）さんが、私をからかうの、
死んでしまいたいくらいだわ。

(8)
amar ma'er tinṭi biṭi
tinṭi sɔnar maduli
ma baper dulali amra
bhai bhajer cɔkher bali

お母さんの大切な 3 人娘
3 つの金のお守り。
父さん母さんは可愛がってくれるけど、
兄さん兄嫁さんの目の敵。

(9)
bare bare kɔri mana
piṛaĕ agun jalyɔ na
baṛir pɔthe anagɔna
kɔlɔṅkɔ bɔi ghɔṭbye na

何度も何度もだめって言ったの、
ベランダに灯を点さないでって。
裏口から出入りばかりしていると
必ずこの罪、みんなに知れわたる。

(10)
jabɔ rɔth dekhite
o ṭhakurpɔ mairi tumar sɔṅgete
jabɔ rɔth dekhite
rɔth dekhite jabɔ ami he
cabbɔ ḍijel gaṛite
phaskelase ṭikiṭ kɔrye
bɔsbɔ tumar pasete
jabɔ rɔth dekhite
o ṭhakurpɔ mairi tumar sɔṅgete
jabɔ rɔth dekhite

プーリーのお祭りの山車を見に行くわ、
ねえ、義弟（おとうと）、あなたと一緒に

山車を見に行くわ。
わたし、山車を見に行くわ、
ディーゼル機関車に乗って、
一等の切符を買って、
あなたの隣にすわって、
山車を見に行くわ。
ねえ、義弟（おとうと）、あなたと一緒に
山車を見に行くわ。

6.2 歌い手たちについて

上に挙げた歌の歌い手たちの名前、居住地、収集時（1981-83 年）の年齢は下の通り。

これらの女性たちは完全な文盲であった。従ってこれらの歌はすべて、口承で覚えたものか、口承伝統にのっとった彼女たち自身の創作である。

彼女たちの職業は、すべて土地を持たない日雇い農民で、収集当時、その多くは栄養不足のためにやせ細って病気がちであった。

(1)
ロッキ・バウリ（45 歳、シアルバタン村、バンクラ県）
(2)、(3)、(5)、(10)
スリモティ・バウリ（67 歳、ビボルダ村、バンクラ県）
(4)、(7)
シュショニ・バウリ（55 歳、フォクラ村、バンクラ県）
(6)
ショルノ・バウリ（62 歳、メタルショホル、プルリヤ県）
(8)
ロチ・バウリ（52 歳、ビボルダ村、バンクラ県）
(9)
モティ・バウリ（57 歳、ビボルダ村、バンクラ県）